

国際学会の報告:「新創造」をめぐる

—The 11th Oxford Institute of Methodist Theological Studiesに参加して

岩本 助成

1. はじめに

この報告は、昨年9月9日に開催された本学会第4回研究集会において行なった「国際学会報告」に加筆し、大幅に修正したものである。今後、本学会員と海外の研究者との交流が増えるであろう。また、本学会員が国際学会において発表したり、討論に参加したりする機会も多くなるであろう。日本からの学会への参加を求める声、特に、若い研究者との学問的な交流を求める声は一段と強まっている。今後の交流のために拙文が少しでも役立つことを願い、この報告を提出することにした。

2. The Oxford Institute of Methodist Studies とは

この国際的な研究会議の詳しい歴史については、英国の Brian E. Beck 博士により、*Exploring Methodism's Heritage: the Story of the Oxford Institute* が出ているので、同書を読んでいただきたい。1958年、リンカン・コレッジで第1回会議が開催された。Dow Kirkpatrick 博士の貢献を忘れてはならない。以後、1962, '65, '69, '73, '77年と、同コレッジで開催された。1982年にはキーブル・コレッジで、'87, '92, '97年には、サマヴィル・コレッジで開催された。会議で発表された主要な論文は、その都度、出版されて

いる。1997年の会議記録は、*Trinity, Community and Power : Mapping Trajectories in Wesleyan Theology*と題され、2000年に、Kingswood Booksの一冊として出版されている。

この会議は The World Methodist Council の賛助下で開かれているが、組織的にはまったく別のものという。また、米国合同メソジスト教会高等教育局が支援している。今回は、オックスフォードにあるブルクス大学の協力があつた。参加者数は、当初は100名ほどであつたが、徐々に増えて、今回は、ウェスリ兄弟の母校であり、オックスフォード大学での最大のコレッジでもあるクライスト・チャーチを会場として、8月13日から22日まで、25カ国から228名の参加者を得て開かれた。

筆者は、この会議のことを以前から知っていたが、誰にどのようにして参加申し込みをすればよいのかを、まったく知らなかつた。かつて、英国のある学者に「どのようにして申し込みをすればよいのか」と手紙を書いたことがあるが、残念ながら何の返事もなかつた。

今回は、シアトル・パシフィック大学のマドックス (Randy Maddox) 教授に直接、私信を出した。幸い、誠実な同教授からすぐに返事が届いた。教授はこの会議の共同議長であるヴァンダービルト大学の M. Douglas Meeks 教授に手紙を書いて下さり、同教授から申し込みの書類を送っていただいた。

初めて国際会議に参加しようとされる方々には、私たちのような「学会」こそが、よい橋渡しの役目を果たせるのではあるまいか。そして一度、会議に出席したら、そこで何人かの知己がきつと生まれる。文通も始まり論文の交換などが行なわれ、相互の情報を知り合うことが出来るようになる。オックスフォードでの次回の会議には、何人かの本学会員が参加して下さることを強く願う者である。

3. 第11回研究会議について

前回の会議以降、5年間をかけたただけあつて、行き届いた準備がなされていた。いくつかの全体会議と10の小グループでの発表、討論とのバランスがよく取れていた。一日は、毎朝の礼拝(メソジスト礼拝書を使用)で始まり、毎晩、クライスト・チャーチのカテドラルでささげられる晩祷で終わっ

た。この霊的なリズムが研究会議のすべてを支えていた。「誓約礼拝」や「主日礼拝式(オックスフォードのウェスリ記念教会において)」が守られた。チャールズ・ウェスリの讃美歌を中心にした音楽会、創作劇が試みられた。また、ブリストル、ロンドン、ブレンハイムへの小旅行、クライスト・チャーチ全体の見学、ブルックス大学ウェスリ研究センターの見学などが組まれた。全体会議の講演者は、各専門分野のほかに、南・北米、アフリカ、アジア、ヨーロッパの各地域から選ばれた。フェニミズム神学、解放神学、諸宗教との対話、アフリカ系アメリカ市民の神学など、様々な演題が選ばれており、女性の講演者や司会者が活躍していた。

インターネット上で、一部ではあるが公表されている「研究会議のペーパー」(<http://www.oxford-institute.org>)を個人研究のために用いることが出来る。ミークス教授は、このページへの論文投稿を続けてほしいと語られた。ページの内容更新があつて、本研究会議の 10 の分科会の総括が新たに掲載された。拙稿を補うものとして総括を読んでいただければ幸いである。

会議の参加者は、早朝ジョギングを楽しむ者、数名で討論を繰り返す者、町での散歩を楽しむ者、ブラックウエル書店で新刊本を読みふける者など、自由で静かな雰囲気を満たした十日間を過ごした。私たち有志は、同じグループのリーダーであつたテッド・キャンベル博士(北米ギャレット神学大学学長、リンカン・コレッジの卒業生)によって、同コレッジをくわしく案内していただく機会を得た。

多くの参加者が旧知の間柄であり、師弟関係も多く、互いの研究課題について、また、執筆中の著作についても、よく知り合っておられる様子であつた。「あなたは何度目の参加ですか。」という質問を度々受けたが、「初めてです。」という答えには一応に驚かれた様子であつた。この研究会議が 40 年近い歴史を通して作り上げてきた人的交流のすばらしさであろう。各研究者の経歴を読むと、この研究会議への参加や研究発表を業績として特記している。学問的に高い評価を得ている会議であることが分かる。

分科会は、聖書神学、ウェスリ研究と初期メソジスト運動、第 19 世紀—第 20 世紀のメソジスト運動、組織神学、世界へのミッション、礼拝と霊性、エキュメニズムと宣教、教会論、実践神学、倫理学と現代の科学技術の 10

分科会に分かれた。ホームページでも明らかな通り、事前に各自の論文を発表している研究者もあれば、そうでない人々もいる。他のグループのペーパーは、ホームページ上で読むしか他に方法がない。同じグループであっても、発表の当日、かなりのページ数の資料を手渡されると、急いで読むのに少し負担がかかる。今後、事前の資料配布と発表方法における非英語圏の研究者のための配慮を要望しておいた。

筆者が属した第2グループ、「ウェスリ研究と初期メソジスト運動」は23名から成るグループであった。米国、英国、ブラジル、日本の研究者で構成され、車座になって12回の研究会を持った。ハイツェンレイター（ウェスリの恵みの概念について）、タイソン（ルターのキリスト者の自由とウェスリ神学との関わり）、ガンター（ウェスリと初期のアルミニウス主義）、コリンズ、メドーズ、ウォーレスなど著名な学者の発表を聞き、討論の時間が続いた。質疑応答が盛んで、終了しても延々と討論が続いていた。

グループでの討論や意見交換以外にも、自由時間や食事時間などに個人的な交流があった。多くの方々が、日本の学会について、また、学会員の学問的関心がどこにあるかを知りたく願っておられた。しかし、詳細は割愛せざるを得ない。以下で、本研究会議のテーマであった「新創造」について特記する。

4. 主題、「新創造、New Creation」について

すべての全体会議での講演、グループでの発表、討論が、本研究会議の主題に向けられたことは申すまでもない。ここでは、特に、開会主題講演としてマドックス教授が行なわれた講演の概括を紹介した後、筆者と同じグループで発表されたコリンズ（Kenneth J. Collins）アズベリ神学大学院教授の論文について、少し詳細に報告したい。

(1)開会主題講演 “Nurturing the New Creation : Reflections on Extending a Wesleyan Trajectory” について

現下の世界的な状況の分析から入ったマドックス講演は、次に、なぜ、今、創造論、救済論、聖霊論、教会論、終末論を統合する形での「新創造」への

神学的な問いかけが必要なのかを論じる。その後、三つの聖書の根拠を取り上げながら、ウェスリ神学が「新創造」に対して、どのような統合的答えを出しているかを問うた。第一は、人格的、霊的な側面であって、第2コリント5:17—20が取り上げられた。ジョン・ウェスリは、1738年—1765年頃にかけて、この側面を強調したと言えるのではないかと、当時の説教を例証しながら語った。新創造が持つ現在性、つまり、「今、ここでの、恵み」という点、同時に、新創造は「進行し、成長していく恵み」である点、連带的で共同的であるダイナミズム（例えば、actionとreaction）などの統合的な面を分析しながら述べた。

同教授は、第二の時期を、70年代以降と見ている。その頃になると、ウェスリには社会的、政治的な次元がより鮮明になってくると論じる。イザヤ書65章17—25ほか、聖書の根拠として取り上げられていた。この時期にも現在性や共同性が力説されるが、「新創造は成長していくもの」という観点がさらに明確化する時期であると、いくつかの説教を用いて論じられた。

第三の時期、「宇宙的、コズミックな新創造という次元」が強調されるのは、70年代から80年代にかけてである。ローマ8:18—23ほか、聖書のテキストとして挙げられていた。未来的な性格を持つが、同時に、現在において先取りされているものであり、また、成長的な見方や共同的なダイナミズムも一段と強められていったとする。

マドックス教授は、これら三つの次元、あるいは、強調の時期が、ウェスリの神学と実践において、一つの段階から次の段階へと単純に移行したのではなく、つねに共存しながら、その強調点において微妙な変化を示したと考察する。ウェスリの千年王国説の微妙な変化、シャルル・ボネーの影響などについては、後の質疑応答において異論が出されていた。

同教授の強調点は、ウェスリによる「新創造の宇宙論的な次元」を解明しながら、霊的、教会的、社会的、政治的に「育成され、成長し、成熟に至る軌道」を描くことによって、ウェスリ神学の新創造論を示そうとしたところにあると考える。

(2) “The New Creation as a Multivalent Theme in John Wesley’s Theology”について

コリンズ教授のこのペーパーも、マドックス博士の講演と共に、数年後に出版予定の「本研究会議の報告書」に掲載されることであろう。コリンズはウェスリの新創造論を、「内面的な業としての新創造」「新生する業としての新創造」「社会的な業としての新創造」「グローバルな業としての新創造」の四つの面で見ようとしている。

① 内面的な業としての新創造

コリンズは「ジョン・ウェスリという一司祭が、当時の人々のニーズに応えたということよりも、第 18 世紀の貧しい人々が、救いの福音である神のいのちに参与するべく招かれていたという事実」に信仰復興運動の核心を見る。「真の宗教は、orthodox にも orthopraxis にも存在せず、orthokardia、即ち、神と隣人に向かう正しい心に存在するもので、聖さと至福を含む。」ウェスリは死の前年、「結婚衣裳について」を説教し、メソジストの群れが形式的な宗教に堕ちることなく、新創造、つまり、神の像へと魂が更新され続けるという内的な原則、内的な源泉に生きる必要があると力説した。

② 新生する業としての新創造

神の像への魂の更新としての新創造は、自然的な変化ではなく、救済論的な出来事である。「誰も魂を新創造することが出来ない。最初に天地を創造された御方以外は。」新創造の証拠としての新生は、靈的いのちの初めであり、質的な変化である。「義とされた瞬間から、あらゆる徳の種が魂に蒔かれる。」
「新生は聖化の第一歩。そこから増し加えられて、完成の日に至る。」

③ 社会的な業としての新創造

ウェスリにとって宗教とは「社会的な宗教」であった。しかし、第 21 世紀的な思考を第 18 世紀に押し付けてはならない。ウェスリは「社会なしに、ほかの人々と共に生き、共に語り合うことなしに、生きていくことは不可能である」という意味での「社会的な宗教」を考えていた。内的な宗教を社会的な次元から見る必要性を考えていた。貧しい人々自身が、メソジストの群れの中で、身心共に責任を取る存在に変えられて行った。ウェスリによる、キリストのからだとしてのメソジストの群れへの指導と配慮こそ、運動の重要点であろう。彼が貧困の解決や政治的な改革のみ目指したと描く現代風解釈に、コリンズは激しい批判を浴びせる。「神と隣人への愛と善き業との関

係は、互いを高め合う関係であった。」聖なる愛なしには、教会は自己義認の危険性、分派的精神、物質主義の発端、聖ではない気質へと墮落して行ってしまう。

④ グローバルな業としての新創造

新創造との関連で、「神の国」をどう理解するか。それは政治的行動や社会秩序の確立と同一視出来るか。ウェスリは自分の主要な仕事は「神への悔い改めと主イエス・キリストへの信仰」の福音を伝えることのみであると考えた。福音を伝えることは、様々なイデオロギーに振り回されることではない。彼は「キリストのからだなる教会において」という教会論的なアプローチを取った。豊かな交わりと愛の分野であり、世を離れてではなく、キリストの主権がすでに始まっている世の中であって、愛を通してホーリネスを通して、神のきよめの業は進められるのである。今は、「来るべき栄光の日の夜明け、より偉大な御業のはじまり」の時である。戦いの教会は、勝利の教会に向けている。今は明確な答えを見出せない自然悪の問題なども、来るべき新しい創造という視点においてのみ、正しく受け取ることが出来るのではないか。新天新地のすばらしさは、人間界のみならず、創造の秩序としての動物の世界にも及ぶ。動物界を蔑む人間であるが、神を愛することなく、神に仕えることをしない人間の姿は、彼らが誤って蔑むその動物界よりも遥かに劣ったものであろう。「真の安らぎは、神の知識と愛とを楽しむという人間性の特権に到るまでは、与えられるものではない。」

⑤ 結論

コリンズは、以上、四つの鍵となるかかわりを考察した。われわれは偏狭で還元的な考え方を避けたい、と彼は言う。新創造を「魂の新生」という観点だけで捉えると、個人偏重主義の萌芽を招き易い。ウェスリが強調した共同的、社会的、教會的な意味付けを失う。同様に、新創造ということ、貧者救済など、物質的な面だけで捉えると、ウェスリの神学的関心の全貌を明らかに出来ない。新創造というテーマを、特定な政治的プランのもとに包摂してはならない。メソジストが知るべき力とは、ジョン・ウェスリの注意深い牧会的指導性のもとにあった力であり、聖霊の臨在の力そのものである。「メソジストと呼ばれた人々」は、時代的には忘れ去られ、また、抑圧され

ていた人々であったが、聖霊のこの力、世の力とはまったく異なっていた力を経験した人々であった。「自己主張の力や自己を誇る力ではなく、権力の強制力でもなく、自己意志の力でもない。イエス・キリストに現わされた神の愛のすばらしい育成力であり、聖霊を通して受ける力である。再説するが、メソジスト・ソサエティにおいて第 18 世紀英国の無視されていた貧しい人々が、彼らの高い品性と神の像へとつくり変える召しと、すべてを充足し、すべてに臨在する神の愛を経験したのである。彼らのルーツは、彼ら自身にはなく、所属グループにもなく、生活環境にもない。神のいのちそのものに与かることへと招き入れる聖なる神御自身にルーツがあることを、彼らは悟ったのである。この価値転換 (transvaluation) という新創造の恵みが、貧しい人々の間に急速に広がった。多くの一般民衆がジョン・ウェスリに聞くことを喜びとした主な理由がここにあったことは疑う余地がない。」

5. おわりに

本研究会議に出席をゆるされたのは昨年のものであった。私事にわたるが筆者が牧師をしている小さな伝道所の中心的信徒であった義兄を、この会議の最中に天に送った。急遽、帰国した同行の妻を見送り、オックスフォードの一角で急逝した義兄とその家族、伝道所の方々を思いつつ、祈りをささげた。筆者の学会参加という小さな事柄も、これら多くの方々の愛と祈りに支えられて、はじめて可能となったことを改めて思わせられている。

今年は、ジョン・ウェスリ生誕 300 年の記念行事が世界各地で繰り広げられた。マンチェスター大学での国際学会には参加したかったが、それを果たせなくて残念であった。しかし、筆者のケースを考えてみても、小さくはあるが、国際的な学問交流の輪は間違いなく広がっている。第 21 世紀は、前世紀にもまさってエキュメニカルな神学的対話の世紀となろう。国、地域、教派というような違いは、学問的研究の中では通用しない。むしろ、人類全体が問うている共通の課題、たとえば、国際平和の問題、地球全体のエコロジーの問題、人種問題、ジェンダーの問題、諸宗教との対話の問題などは、誰もが避けて通ることを許されていないのである。

また、当然のことであるが、ウェスリ兄弟をはじめメソジスト運動に、自分の解釈を「読み込んだり、読み落としたり」しないで、歴史的資料そのもの、原典そのものから、正確に、確実に「読み取って解釈する」ことの重要性を、いよいよ痛感させられる。そして、研究の初心にかえることを与えられることが、会議出席が結ぶ実の一つと言えようか。

多くの研究者との出会いは、実に大きな恵みの賜物である。出会いという小さなきっかけを誠実に発展させ、大事なものとして育てて行きたい。ほかの研究者との密接な交流なしには、より充実した自分自身の研究環境をつくっていくことは至難だからである。

(前 大阪キリスト教学院 院長)